

講演三

地方官衙と鞠智城

講演者紹介
坂井
秀 弥

(さかい
ひでや)

関西学院大学大学院修了後、新潟県教育委員会において、遺跡発掘調査と埋蔵文化保護行政を担当。文化庁記念物課（埋蔵文化財部門）に在職し、文化財調査官・主任文化財調査官を歴任。現在、奈良大学教授。

・講演二 「地方官衙と鞠智城」

坂 井 秀 弥（奈良大学教授）

はじめに

只今紹介にあずかりました奈良大学文化財学科の坂井です。よろしくお願ひいたします。私は平成五年から一六年間文化庁の記念物課というところにおりまして、熊本には何度もお邪魔しまして、鞠智城にも何度か行つたことがあります。確か平成一六年か一七年頃が、最後に訪れた機会でして、その後残念ながら訪ねる機会はなかったのですが、今年三月に刊行されました大変分厚い重厚な報告書を手にしまして、私の在籍中から課題であつた学術的な研究成果がまとめられて、従前三期区分であつたものが土器からきちんと五期区分に改められて、いつ頃どういう出来事があつたのかというところまで研究が深められたということで、大変感銘を受けています。

私に本日与えられた課題は「地方官衙と鞠智城」ということです。鞠智城が存在した期間は調査研究によつて七世紀の半ばから一〇世紀の半ばくらいまでです。この期間というのはまさに古代の律令国家が成立して崩壊するという期間にあたつているわけで、鞠智城は律令国家が機能した間、経営維持されたということです。律令国家の時代というのは役人と役所の時代でもありますて、全国各地に役所が作られていましたという

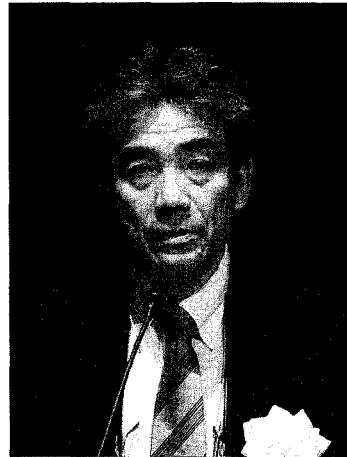


写真 13 坂井秀弥氏

ことで、ある意味では鞠智城と官衙との関連も考えられるのではないかということもあるわけです。そういう観点から本日は、発掘された地方官衙、官衙というのは役所のことです。具体的には国とその下に置かれた郡の役所。それともう一つは、鞠智城の場合は当初は南に対する備え、軍事的な機能が言われています。日本の北辺の東北地方には、城あるいは柵と呼ばれた、城柵じょうさくが造られているわけです。そういうものとの比較も加えて、これから少し見ていきたいと思います。私のレジメは、大変簡素な作りになつております。五五頁から、ここに取り上げました図面はだいたい再録されていて、ここに載せてないものも少しありますので見辛いかもしれませんけどご容赦いただければと思います。

一、鞠智城の時代と律令国家の地方官衙

鞠智城は七世紀の後半に築城されました。具体的には何年かとわからないわけですが、いずれにしろ六六五年から六七〇年くらいの間であろうというのがほぼ共通した理解です。そして六九八年に修理され、記録としては八七九年まで残っています。考古資料からはその後しばらく継続して一〇世紀半ば、一〇世紀の第3四半期、一世紀を四つに割ると三つ目までは存続したと報告されています。

この時代には律令国家を支えた地方官衙、国府こくふや郡家ぐうけ、別の用語で国衙こくがや郡衙ぐんがという言葉も使いますが、考古学上ではあまり区別して使っておりません。それから東北の城柵は戦前からの重厚な研究がすでにある

わけですが、この鞠智城の機能については三つの機能が考えられています。一つ目は有明海の対外防衛で、これは今の石井先生のお話にも対外防衛関係というのは大変重要で、最初から最後まで一貫して対外防衛というものはあるというお話でした。それから二つ目は大宰府の物資・兵器備蓄、兵站的な機能。そして三つ目は南九州支配です。このことを地方官衙との比較から少し考えてみたいというのが本日の私のテーマです。鞠智城の機能が問題になるのは、鞠智城の位置が大宰府から見たら六二キロ南に偏ることです。九州北部から瀬戸内・畿内が分布の中心ですが、そこから南にかなり偏るというのが鞠智城の大変重要なポイントです。そのためこれがここに何故造られたかということになるわけです。それから石井先生が現地を訪れて大変平坦な地形を広く取り込んでいると、他の古代山城とはえらい違いだと言われましたが、これも現地に行ってみればよくわかります。こういう特徴が起因いたしましてどういう機能、性格かがいろんな角度で議論されてきたということです。

これからスライド一〇枚くらいは律令国家がどういう経過を辿つて成立したか、それを簡単にかいつまんで話をしてみたいと思います。古墳時代の大和政権から律令国家が建設されるのは、七世紀のほぼ百年をかけた動きの中にはあります。六世紀までは古墳時代で七世紀は一般的に飛鳥時代といいますけれども、百年をかけて律令国家は成立しました。六世紀の終わりから七世紀のはじめ頃に、古墳の前方後円墳の造営の終わりがあり、これに替わって仏教文化を象徴する全く新しいイデオロギーである仏教が入つてくる。それを象徴するのが五八八年の飛鳥寺の建立です。その後、六四五年の大化革新後、孝徳天皇の時代に本格的な中国式の宮殿が大阪の難波宮に築かれます。そして再三取り上げられている六六三年、白村江の戦いの敗戦で大きな衝撃を受けて、新羅と唐に攻められるかもしれないという、国家存亡の危機に直面します。そのため

軍国体制を構築する必要があり、律令国家が出来ていく大きな要因だといわれています。そしてほぼ百年をかけた動きが完成するのが七〇一年、大宝律令の完成です。八世紀最初の年に完成すると、こういう流れになります。

以下、画像で見てていきます。これは大和政権の時代です。大きな古墳を一生懸命造っていましたが、それが大和盆地では見瀬丸山古墳という全長三〇〇メートルを超える古墳が最後に造られます。ちょうどこれと交代するように飛鳥にはじめての瓦葺の本格的な仏教寺院が成立します。それまでは大陸的な瓦葺の建物がまったく無かつた中で、朱塗りの柱、白壁、これを見た人々はどう思つたか。新しい文化が到来したと強烈に意識したはずです。飛鳥寺は今はひつそりと小さなお堂があるのみですが、その後間もなく造られたのがこの法隆寺ですね、七世紀の終わり頃に再建されはじめて八世紀のはじめ頃には完成したのではないかと言われています。そして中国式の宮殿ですが、大阪に難波宮長柄豊倫宮がつくられます。この宮殿の模型が大阪市立博物館に展示されています。今までに無い本格的な宮殿です。これが大極殿ちょうどういん、朝堂院ちょうどういんという広場があつて、長い建物がきれいに並ぶ、こういうものが大化革新の後間もなく造られます。

その後白村江の戦いです。新羅が唐と結託いたしまして百済を滅ぼすと。で、六六〇年に滅ぼされますが、その残党が日本に援軍を求めてきたので、援軍にいつたところが大敗を喫しました。そのために国家の防衛のために基肄城ですとか大宰府の水城、それからずっと来まして瀬戸内、畿内の大和の高安城まで造られるということになります。実際にこれはご当地太宰府ですが、この背後には大野城がありますし、ここに水城という大きな土壘が、ここに拡大してありますが大変すごい防衛ラインを引くということです。短期間のうち、よくもこれまで造ったなというのが現地に立つと身に迫つてまいります。それから記録には残つております。

ませんが、岡山県の鬼ノ城です。地名の鬼は城で、城という意味です。発掘調査の成果をもとに総社市が、標高差三〇〇メートルある山の上に城を復元しました。こういうものを造つて日本を防衛しようとしたのです。そうしたことで国づくりを中国の律令国家にならつて建設していくことになります。

全国は国、郡、里さと、これは里という字を最初使つていますが後に郷という文字を使つています。現在につながる菊池郡とか木野郷という話もありましたが、現在にも残る地名がこの時代に誕生したということです。平安時代で全国に六六か国、郡は約六〇〇、その下にある里は奈良時代の前半で約四、〇〇〇というふうにいわれています。官僚制が律令国家の本質的でありますから、中央には宮殿を造り、地方には役所を造る。里は官僚機構がないので里の役所は基本的にはないだろうと思ひます。戦前の澤田吾一さんの研究では平安時代の人口は約六〇〇万人といわれていますが、最近、奈良時代は四五〇万とか五〇〇万とかではないかといわれています。

これが全国です。国の領域もきちんと線引きされて、こんなふうにきちんと全国が編成をされました。それから奈良の都から全国にくまなく道路がつけられました。国が敷設した立派な道路をつけるということでの情報伝達したり軍隊を派遣するために備えたということになります。

二、国府（国衙）・郡家（郡衙）

国府肥後はここになります。ここに黒い丸がついていますがこれは筑後の国の国府が発掘でわかつています。それからもう一つ、佐賀県の肥前の国府、国庁が明らかになっています。

役所の中枢部分は政庁と言っています。国の政庁は国庁、郡の政庁は郡庁と言います。今は熊本県の役所

は県庁といいます。奈良市役所は奈良市庁といつていて、その政庁の構造は、お配りしているレジメは平城京ではなくて藤原京です。鞠智城が整備された時期の宮殿をあげたほうがいいのかなと思ったのですが、この画像では平城京です。天皇の日常的な生活空間である内裏、それから天皇がお出ましになる大極殿、その前には長い建物の朝堂がきちんと整然と配置されます、これが中央の宮殿です。それで西海道、ご当地九州福岡の大宰府ですが、これと基本的に共通した構造で、ここに広場を持つて、長い建物があつて、ここに正殿をもつ。これは都府楼の正殿です。北のお城の多賀城も基本的にはこの広場を持つて、正殿、脇殿とこういうふうになります。それから一般的な国の国庁ですが、これは全面的にほぼ発掘された下野の国庁、栃木県の国庁ですが、これも広場を持つて長い脇殿がくると。日本で最初に発見されて注目された近江の国庁は、正殿の後ろの後殿と脇殿があるということで、この大極殿と朝堂院をプラスした格好のものが中枢の基本形となるということがわかります。

都の大極殿は復元に総工費一八〇億円かかりました。何でそんなにお金をかけるのかというかもしれませんが、これが出来てはじめて一キロ四方の平城宮の中にこういうものが出来て、どんな場所だつたか古を偲ぶことができるというものです。この幅、広さですね、約四五メートル、高さは地面から二九メートルで、大変でかいものです。これは実際のものと寸分たがわないかと言われればそれはわかりませんが、ほぼこういうものが七一〇年に遷都された平城京に出来たということになります。

国庁ですがこれは近江の国庁ですね。これは八世紀の半ばから後半にかけて造られる国庁ですが、全面瓦葺として前庭、広場を中心脇殿があります。それから正面には門が開く。この門は八脚門といいまして、柱が外側から見ると八本でして大変格式の高い構造です。それからこの国庁の築地塀、土塀ですが、こうい

うものできちんと空間を囲うというのが役所の中核部の構造です。下野の国庁では当時の実物大の建物をイメージしたものが造られていますが、実はこれは前殿として後ろの杉林の中に宮野辺神社というものがありまして、ここに正殿があることは間違いないありません。

この国庁の空間の中で何をしたかですが、一つは国司の元日朝拜という儀式をやります。これは国司ですが、国司は天皇の言葉を携えて都から来る、地方ではいわば天皇の役割をします。その前に僚属、郡司、国内の郡司を集めて新年あけましておめでとうございますというような儀式をやつたと。おもしろいことに儀式が終わつた後、宴会をやります。「宴を設くことは聽せ」「当処の官物及び正倉を以つて充てよ」ですかから税金で宴会をやると。今でしたら大変なお叱りを受けることですが。歴史的には政治にはこういった儀礼と飲食、宴会というのは大変重要なものとして付き物です。このほかに下野の国庁では隅のゴミ捨て穴から木簡の削り屑が出ていますので、こういった事務も執り行つたであろうと考えられています。

これは島根県の出雲国府です。出雲には風土記がありまして、詳細にいろんな施設のことが書いてあってそれを元に復元模型を作つてています。国庁を中心いろいろな施設が集まつていて都市的な空間を創つているということがわかります。

郡衙 続きまして郡の役所ですね。郡の役所は郡庁という、先ほども少し模式的に示した中核となる施設と正倉という高床の倉庫群を中心とした正倉、それに館、厨家。館は国司が来た時に泊まるとか、厨家は食糧を調達したり料理を作つたりする施設です。何故こんなことがわかるのかというと、群馬県の上野国には国司が交代した時の記録が残っています。そこに郡の役所、郡家にはどんな施設があつたかということを事細かに書いています。正倉、郡庁、一館、二館、四館、厨家と、こういう記録がありますから郡の役所には

こんな施設があつたということを知ることができます。実際に文字で書かれたものが地下から出ると大変なことになります。

これは今説明した新田郡^{にった}庁がまさに出てきたところです。赤城山だと思います。県道に面して宅地を作ろうとして、地元の教育委員会が調査したところ、でつかい柱がいくつも並んで出てきたので、これは変だと思いましてさらに広げたところ、郡^{ぐん}であることは間違いないということがわかりました。だいぶ調査が進みましてこんな状態になっています。ここに郡^{ぐん}庁があります。これが五〇メートルですから一〇〇メートル四方くらいの、普通一〇〇メートルというのは国^{くに}庁クラスの大きさで馬鹿でかい規模で、周りに正倉があります。そして、その周りを全部溝で囲む、幅三メートルから五メートルあるかなり大きな溝で区画しています。それから東山道という当時の一級国道がまさに役所の前に接続しています。郡^{ぐん}庁はこんな構造になつております。おりまして、今この絵では何も描いてありませんが、ここに正殿と考えられるものが後の発掘で出ていますので、ここに大きな建物があります。周囲は近江の国^{くに}庁のように築地壇ではあります。木の板の壇垣で区画しているということがわかりました。これは発見した時ですが一つの柱を立てるために掘つた穴です。非常にでかい。この建物の長さが五〇メートルもあります。どんなふうに柱を立てたかということですが、この穴を半分掘りますと土の違いで、柱を立てるために掘つた穴がこの大きさです。ここに柱が沈まないようになります」とか、「ここに竪穴住居があります」とか言つても何でそんなことがわかるのかと思うかもしれません、考古学者はきちんと土の違いを見て正しく掘つているということです。

この他に正倉を見ると皆さんイメージするものがあると思います。東大寺の正倉院、今は宮内庁管理なつていますが、郡の役所には米を備蓄するための高床のでかい倉庫が規則的に何棟も並んでいたということです。これは埼玉県の深谷市で発見された遺跡を復元したものです。こういうものがずらつと並んでいたという風景はその地域の人にとっては新しい律令国家というものを肌で感じさせる、目で感じさせるものではなかつたかと思います。

先ほどは群馬県の太田市の新田郡庁という遺跡でしたが、その隣の伊勢崎市でおもしろい遺跡が見つかりました。ここにこういう記録が残っています。五、六年前、小学校の体育館を造ろうと思って発掘調査をしましたら、このようないいものが出土しました。これはこの小学生が立つてているのですが、この地下から、これを見ると土の違いでここに何かあるなということがわかりますね、黒っぽい。最初これは丸くて何か変なもので訳がわからないものが出てきたという話でしたが、輪郭を見ると八角形です。この記録を見ますと八面甲倉はちめんこうそう、八面はちめんという字が見えるのです。これを気づいたのは交代実録帳こうたいじつろくちょうの研究を長くやっておられた前沢さんという私の先輩ですが、前沢さんが電話をかけてきてくればして、「あれは八面甲倉だと思う。文献とぴつたり一致した奇跡的な発見である」という連絡をいただきました。それまでどんなふうにこの遺構を評価していいのかわからなかつたのですが、疑問が氷解しました。これは間違いなく上から見ると平面が八角形の倉庫です。子どもたちがいるところに柱が立つており、縦横きれいに並んでいます。

鞠智城でも八角形の建物がありますが、日本の古代には八角形の倉庫というものもあつたということです。レジメの方にこの三軒屋遺跡の八角形の建物の柱の位置を示しておきましたが、この鞠智城の八角形の建物は真ん中に大きな柱があつて放射状に柱が並んでいます。ですから柱の配置からすると建物構造は同じ

とは言えません。建築的にどう評価するか、私は素人ですからわかりませんが、八角形のものには倉庫があるということです。それから高句麗の丸都山城がんとというのでしょうか、あそこにも八角形の建物がありますが、あれも礎石の配置は格子目状にありますので、倉庫と見た方がいいのではないかと思います。

三、東北地方の城柵

次に東北の城柵です。実は私は新潟の出身でして、今も実家があるのは新潟市沼垂ぬつたりというところです。この地名は日本書紀大化三年、六四七年ですが、渟足柵を造るという記事がありまして、そこに生まれ育ったというのが私の誇りでして、それで古代の城柵にも興味があります。大化革新の直後、日本列島の北側の地域を古代国家は城柵、城あるいは柵という字を使う施設を造っていきます。文献上は八一二年徳丹城まで設置されました。東北の城柵は国府や郡家の役所の役割を持つていたということです。東北地方を経営する時に何をしたかというと、まず移民を送り込んで地域開発を進め、蝦夷との戦いに備えるということをやります。それで陸奥の地域では三八年戦争がんぎょうという八世紀後半から九世紀初頭まで長く続いた抗争、戦争もあったわけでして、その後九世紀の後半には元慶乱が秋田を中心として勃発しています。大変抗争が長く続いたというのが東北地方です。

この構造はその代表となる多賀城ですが、これは陸奥の国の国庁も兼ね備えているわけです。先ほど見たような中枢を成す政庁があります。上空から見ますと標高一〇メートルから二〇メートルくらいの周りが高い、比較的平坦な丘の上に造られています。ここに政庁があります。外側をきちんと築地あるいは材木を連続して立て並べた塀で囲みます。これが多賀城にとっての外側の城壁ということになります。それで平安

時代にこの辺は少し造りなおして門の構造が内側に引き込まれるような格好になります。これはお城でいうと内枠形といまして、方形に引き込んだ空間を内側につけます。それは防御を固めるためです。この門は多賀城が襲撃された後に造りなおしてますから、まさに国司たちは自分たちが殺されるのではないかという危機の中で一生懸命防衛機能を高めようとすることも窺えます。そして、役所的な儀式や儀礼の場でもある政庁が東北の城柵の場合はあつたわけです。現地に行きますとこんな立派な基壇が復元されています。ここで蝦夷の服属儀礼をしたり、一緒に宴会をやるとかに使われた空間であつたということです。その外側の城壁ですが、これは秋田城の事例ですが土壙を三メートル五〇くらいの高さです。それから門は八脚門で非常に格式の高いものです。これが外側の城壁であるということになります。ただこういう城壁は、こちら西日本の朝鮮式山城の土壙、石を下に置いて土壙を造つたり、石を積んだ石垣とはだいぶ趣が違うということになります。

四、地方官衙からみた鞠智城

さて、最後に鞠智城のことについて少しコメントをしておきたいと思います。鞠智城には従来からコの字型配置の建物空間があるとされています。これは報告書に掲載されているⅡ期七世紀末から八世紀初頭、七世紀の第4四半から八世紀の第1四半の前半、平城遷都から八一〇年くらいまでには、発掘された建物の中で赤く色づけられている建物が建つていたと考えられています。コの字型配置というのはここ 부분です。この北側は土地が削られていてこの建物の全容はわからないそうですが、南北に長い建物がこうあってそれで東西の建物がここにくるということで、片仮名のコの字、まあ横にして見ていただくと片仮名のコの字の

ように見えるということでコの字型配置というように言います。それでこれがどんな性格の施設と考えたらいいかですが、一つの問題はこの広場を中心としてこの周辺の建物が求心的な配置をしていないことです。ここはかなり広くて北側の東西の建物が少し小型で、これですともう一棟ここにないところの空間は縋まらないわけです。こちらにこの位置にありますがここには無い、というようなことがあって、ここを一体の施設としてコの字型の施設として評価してよいのかどうかというのは気になります。それとこことここは一メートルか一メートル五〇くらいの段差がこの道路を隔ててあります。こちら側全体の土地が削られていますので当時の状況はよくわかりませんが、どういうふうに評価できるのかというのが気になります。

それから先ほど話をしました八角形の建物ですがここに二つあります。少し見づらいのですがこれが放射状の配置となります。群馬県のものとは柱配置が違います。ただこの柱の抜き跡から炭化米が出ています。あるいはここ周辺の炭化米が偶然入ったという理解もできる可能性もありますので、倉庫だと言えるのかどうかは慎重に検討する必要があると思います。それから倉庫ですが、これは第4四半という意味、ですから八世紀終わり、平安時代に入る頃から平安時代の八六〇年、七〇年八〇年頃までの区間ですが、かなり倉庫が充実してきます。これが先ほど矢野さんが言われた食糧の備蓄機能が高まつたということですが、ただし郡家の正倉と比較するとかなりでかい方になります。それから溝で囲うというようなことはありません。いずれにしろ高床の米を備蓄するという構造は共通しているというように思います。

最後、南との関係ですが政府がありませんので東北の城柵とは明確に異なるということがわかります。そういう北の城柵のように政府を持たない城として南との関係を持っていたか持っていないかはそれだけで何とも言えないところだと思います。鹿児島県の地域に薩摩国、大隅国が建国されますが、移民を配置して経

営をしていきますから東北と基本的には共通していますが、そこから一〇〇キロ離れます。東北地方は多賀城から一番北の城柵まで二〇〇キロあって、今の県域では宮城県から山形県、秋田県、岩手県。北の方は除きますが、かなり広い範囲を支配するために多くの城柵を置いているわけですが、鹿児島県周辺ではそれはつきりしないということで、私は南との関係はあまり強くみないでいいのではないかと個人的には思います。全くゼロだと申し上げません。

それで考古学的なことからすると、伝統的に八代海、有明海はやはり朝鮮半島とのつながりが強い地域です。江田船山古墳の副葬品もしかりです。先ほどのお話があつたこともそうです。それから私一つ最後に申し上げておきたいのは、この有明海、八代海は干満の差が非常に大きい海域だということです。四、五メートルほどもあり日本最大です。それから一方朝鮮半島の東側は日本海インヂヨンですから、日本海というのは潮位の差は一〇センチ二〇センチ、ほとんど無いです。しかし西側はその逆で仁川辺りでは八メートルという世界最大の潮位の差があるところがあります。そうすると船で行き来する時は、その干満が大きいということが前提で行き来しなければならない。それはこの有明海と朝鮮半島の西海岸、大変共通するというのも両地域を結びつける地理的条件の一つではないかなというふうに思います。

あまり鞠智城を考えるための有益なお話はできませんでしたが、以上で私の話は終わりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。